SFSFSFSFSF

kankurou

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＳＦＳＦＳＦＳＦＳＦ

【Ｎコード】
Ｎ９９１２Ｏ

【作者名】
ｋａｎｋｕｒｏｕ

【あらすじ】
あんまりＳＣＩＥＮＣＥじゃないけど、まあ特撮やその手の物で興味をもらって
書こうと思いました。
２０世紀少年とかを参考にしたりしました。

西暦２２５０年。
人類は新たな新境地を迎えようとしていた。
地球温暖化現象により、弱化した地球にはもうすめることができ無

くなることを知り
（米・露・伊・仏・独・英・日・中）８カ国環境保全会議で決定した火星移住計画を、
実行することを決めた。
ＮＡＸＡ国際宇宙センターは、栄光のアポロ１１号をリスペクトし
「アポロＥＸ」ロケットを作成した。
乗組員は
ジョン・ウォーカー。
武藤大樹。
アレックス・セナハン。の三人だった。
無事、打ち上げられたアポロＥＸ。無事に火星にも到着した。

しかし事件はここから始まった・・・。

ウルトラマンや仮面ライダー、もしかしたらアメコミヒーロー、
特撮作品キャラから、オリジナルキャラまで沢山出して、沢山面白
くします！！

よろしく！

SFSFSFSFSF

あんまりＳＣＩＥＮＣＥじゃないけど、まあ特撮やその手の物で興味をもらって
書こうと思いました。
２０世紀少年とかを参考にしたりしました。

西暦２２５０年。
人類は新たな新境地を迎えようとしていた。
地球温暖化現象により、弱化した地球にはもうすめることができ無くなることを知り
（米・露・伊・仏・独・英・日・中）８カ国環境保全会議で決定した火星移住計画を、
実行することを決めた。
ＮＡＸＡ国際宇宙センターは、栄光のアポロ１１号をリスペクトし「アポロＥＸ」ロケットを作成した。
乗組員は
ジョン・ウォーカー。
武藤大樹。
アレックス・セナハン。の三人だった。
無事、打ち上げられたアポロＥＸ。無事に火星にも到着した。

しかし事件はここから始まった・・・。

ウルトラマンや仮面ライダー、もしかしたらアメコミヒーロー、
特撮作品キャラから、オリジナルキャラまで沢山出して、沢山面白くします！！

よろしく！

人物紹介・物語

☆あらすじ

あんまりＳＣＩＥＮＣＥじゃないけど、まあ特撮やその手の物で興味をもらって
書こうと思いました。
２０世紀少年とかを参考にしたりしました。

西暦２０７９年。
人類は新たな新境地を迎えようとしていた。
地球温暖化現象により、弱化した地球にはもうすめることができ無くなることを知り
（米・露・伊・仏・独・英・日・中）８カ国環境保全会議で決定した火星移住計画を、
実行することを決めた。
ＮＡＸＡ国際宇宙センターは、栄光のアポロ１１号をリスペクトし
「アポロＥＸ」ロケットを作成した。
乗組員は
ジョン・ウォーカー。
武藤大樹。
アレックス・セナハン。の三人だった。
無事、打ち上げられたアポロＥＸ。無事に火星にも到着した。

しかし事件はここから始まった・・・。

ウルトラマンや仮面ライダー、もしかしたらアメコミヒーロー、
特撮作品キャラから、オリジナルキャラまで沢山出して、沢山面白くします！！

よろしく！

☆人物紹介

加納（かのう）　俊平（しゅんぺい）

本作主人公。　１９歳。

何ら変わりない平凡な日々を送っていたが、隕石落下事件において宇宙を救える力を与えられる。

体に特異体質が見つかり、戦士を召喚したり、変身したりすることができる。

ＲＩＤＥＲ　（ライダー）

スキンヘッドの科学者。倒れている光を助けて、その際特異体質を発見。

宇宙を救うために最善のバックアップを取る男。

若かりし頃、敵の組織に自分の教授を拉致されている。

☆敵

地球外生命体

宇宙から忽然と現れたエイリアンや、奇怪生物。

その実態は謎に包まれている。

エビルサーペント

地球内の悪。沢山の闇組織を各平行世界から集めている。

源治と名乗る男が率いている。

最初はこんな感じです

新キャラが出たら、かきますんでよろしくです。

第一話　「終止符／ｐｅｒｉｏｄ」

「われわれＮＡＸＡは新たに月に住みかを発見。ここには鉱産資源
そして充分な酸素もそろっている。新たに開発された人工太陽は
我々の予想を
はるかに上回る出来だ。それにより地盤が変化したためか、あま
り重力差がなくなった。
以上、２月１５日８時１９分の中継を終わる・・・。」

ラジオを俺は聞いていた。

西暦２０７９年、人類はアポロＥＸの打ち上げを成功し、地球温暖
化により弱体化した地球には、
もはや住むことができないということを知り、環境会議委員長は月
移住計画を設計。

それにより科学が急激に進歩していった。

２０１２年のマヤの予言は事なき終え、あっという間に時が過ぎて
いった。

まさか、これから先こんなことが起こるとは誰一人想像もしていな
ければ、考えてもいなかっただろう。

俺の名前は加納俊平。
１９歳、まさかこんなことになるとは思わなかった。

「はい、今日も月調査団体の方とお電話がつながっております。スティーブさん？」
テレビで女性アナウンサーが中継をしていた。
「こちら、スティーブ。たった今人類初の月移住成功者が現れた。それは私スティーブ・ルイだ！。
ビニールハウスのように見えるこの家も、太陽光パネルで電気がつくようになっている。どうだ！
やはり、みんなもこっちへ来るがいい！心地が良いぞ！」
「そうですか！それは素晴らしい・・・。それではまた一週間後。」
通信を切断したＱＱＱ放送社はいつものニュースに戻っていた。
俺はそれをただ見つめていた。
一週間の月日がたち、再度中継が行われた。

この一週間の変化といえば、１０００人が月に移住したということ。

「さあ今日もつながっております。スティーブさん？」

「う・・・・。は・・・・・・・・・・。うわあああああああああ！！！！！」

「え！え！うそ、きゃあああああああ！！」

女性アナウンサーは中継の映像をみないために目を伏せた。

その気持ちは俺にもよく分かった。それには、テレビという公共では映してはならないもの。血。

それが、カメラのレンズにこびりついていた。そして無数の死体・・・。

「うそだろ・・・。そんな・・・。」

俺はつい、声を出してしまった。

そして、カメラの右上部に、あるものが映っていた・・・。

それは、全く信じることのできないもの。ＳＦ映画でしか見たことのないもの。

空想の産物だった。

それは、エイリアンだった。

「こんなものが本当にいるのか・・・。」

「うはあああ！！！く・・・。」

うめき声がテレビから聞こえてきた。そしてテレビをみると、死体には血の赤色と、

謎の緑の粘液。それは、全員に巻きついていた。画面は砂嵐になり、ただうめき声だけが聞こえていた。

そして１２秒後、再び画面が切り替わりテレビにテロップが流れていた。

「テレビの前の皆さんへ・・・。そろそろあなたたちに終止符が打たれようとしています。サヨナラ。地球。」

「終止符？・・・。それにサヨナラ地球？」

すると、カーテンからさす日の光が一瞬にして無になった。

あたり一面は暗くなりものすごい轟音とともに、隕石が降り落ちてきた。

「なんだ・・・。あれ・・・。」

俺は目の前に広がる光景をただ見つめていることしかできなかった。

「た、只今、東京の昭島に巨大隕石が・・・。同じ時間にアメリカ、ラスベガスに同じ隕石が・・・。」

テレビを見ると茶色い隕石がそびえたっていた。

「こ、これは・・・。」

どうやら野次馬たちが落下地点にたむろしているのが分かった。ついつい俺も足が動き、自転車で

落下地点周辺に行くことに決めた。

「はい、どいてどいて。」

白衣を着た男が周りの野次馬たちをな払いつつその隕石に近づいた。

その男はゴムの薄手の手袋はめ、そのひとかけらをとった。

「こちら、石見。只今隕石の一部を採取した。ただちに転送する。」

ポケットから１６センチのカプセルを取り出しよく分からん番号を打ち込んだ。

そして冷気が外から出てきてそれをカプセルに入れた。すると一瞬にして転送された。

「転送完了した。」

石見は帰ろうとすると、少しずつ隕石の様子が変わっていった。隕石は無数の緑の液体が現れた。

液体は飛び跳ねて、人の口や鼻の穴に入った。

「う・・・。うあはっはははははあああああ！！！」

体が見る見る緑の斑点模様に覆われていった。

俺は自転車をこぎ、速攻で逃げた。

「ぐはああ！」

隣を走っていた３０代の男は液体に取りつかれた人間にパンチを浴びせられ死んでいった。

第二話　「崩壊／Ｃｏｌｌａｐｓｅ」

「そんな・・・。マジかよ！」

チャリをものすごい勢いでこぐも相手は追いかけてくる。

そして、憑依されている人々は俺を追いかけて来ていた。そのうちの一人の男がタイヤをけると、

俺はその場に倒れた。

「や・・・ばい・・・・。」

顔面にパンチを入れられ、続いて他の人までも。リンチされたあげく、俺は顔面を強打していた。

「ん・・・。ここはどこだ・・・。」

目を覚ませばあたり一面白い壁でおおわれていた。

ふとほを触ると、ものすごい激痛が体全身を稲妻のように、走った。

「痛えええええ！一体何だったんだよ・・・。さっきの奴ら。

それになんだよここ・・・。」

するとどこからか声が聞こえてきた。男の声だった。

「すまない。でも助かっただけありがたいと思え・・・。君以外は全員グリーンモンスターに

憑依された。何とか君を助け出した。いや～良かった。」

赤く塗られたドアの向こうからスキンヘッドの男が現れた。

その男は黒淵のメガネをかけていた。身長は１８０センチくらいの体つきの良い男だった。

「一体何なんだよ。グリーンモンスターとか、あの隕石とか・・・。わけ分かんねえよ・・・。」

「それじゃあまず、あの隕石はメトロイトナンバー、１００３９ガラン。

あれは月の破片の一部だ・・・。あれを宇宙船代わりとして乗ってきた奴ら・・・。

それをグリーンモンスター。エイリアンナンバー　３７４５。

彼らは、人の穴という穴から憑依することができる。凶悪なモンスターだ。

入った人の体には斑点ができる。これが悪魔のあかしだ・・・。

彼らは脳にある危険信号を第一に破壊。食いつくいして殺人をする。」

俺は三十秒間目を見開いていた。

俺は大の特撮ＳＦ好きだ。エイリアンや隕石、怪獣怪人、ＵＦＯ、超常現象、ＵＭＡ、妖怪。

ありとあらゆるジャンルが好きな俺だが、それは全くの空想の産物だと思っていた。

それが、身近に存在し、なおかつ世界を滅ぼそうと試みている。

あり得ない・・・。

「あり得ない・・・・・。」

「あり得ないついでだが、君に特別な力を与えた。」

それを聞いたとたん俺の額から冷や汗が出てきた。

小さな滴となり落ちてきた汗は、手を伝い布団へ落ちた。

「へ・・・。？うそだろ～～～～～～！！！

俺の体にどんなことをしたんだ？おい！おおおおおい！！！」

一言で気がくるっていた。

「安心したまえ、それは君が生まれ持っていた才能。

次元転送機能。クラインの壺だな・・・。」

男は温かいコーヒーを魔法びんから注ぎ、マグカップへ入れた。

「君にはとっておきの力がある。それは空間と空間を行き来できること。それにより可能になった

次元転送機能。用は人間クラインの壺。無限の力が君に眠っている。」

「どういうことだよ！意味が分からん！クライン？の壺って何だよ？次元転送機能って何だよ？」」

俺は焦りながら彼に聞いた。手には汗をかいていて、それを布団にこすりつけた。

「君の思う通りに、誰かがその力を分け与えてくれたり、助けに来る。たとえばマゼンタの仮面やら、

Ｍ７８星雲の人とか・・・。アメリカンヒーローとか・・・。君の力の使い方によって、それはきまる。」

「んじゃあ、グリーン何とかからも、身を守ることができるんですか？」

「守るのは、自分じゃない。世界を、地球を守るんだ！！」

男は声を張り上げて言った。そんなに期待しているのだろうかこの力・・・。

俺にも生きているという証を作ることができる。

「頼んだぞ！この地球を守ってくれ。」

俺は特撮が好きだ。怪獣も好きだが、やはりはヒーローだ。

この地球を守るのは俺しかいないんだ。拳を握りガッツポーズした。

「任せてくれ。でもどうすれば・・・。」

「簡単だ！君がピンチになった時、三回唱えるだけ。すると君が変わっているか、

それとも助けに来ているか。どっちかだ。この星はやがては崩壊する。

だけどそれは当分先の話。君が死んでからかもしれない。でも奴らのせいでは崩壊させたくない。

分かるだろ・・・。この気持ち。」

その言葉を聞いたとたん、俺の鼓動が高鳴り、ベッドから立ち上がった。

すぐさま駆け出す予定だった。

でもあることを聞くのを忘れていた。男の名前だ・・・。

「あんたの名前は？」

「名前か・・・。名前は無い。コードネーム、ＲＩＤＥＲ。よろしく！

君の名は分かっている。さあ行きたまえ！！！」

第三話　「転送／transmission」

チャリをこいで何分が経過しただろうか。

火事の焼け跡が今でも残り、余火が残っているこの場所。

すべてはグリーンモンスターのせいだった。

「でてこい！怪物ヤロウ！！おれが始末だぞ！」

俺は全ての戦士の力を持っている。

だが使いこなすことも全て自分次第・・・。でも俺は、やってみる。

「来い・・・。仮面ライダーディケイド！！！！」

大声を出して俺は叫んでいた。

心の中で三回唱えた。すると、全方位の全世界は、光り輝き、残りの闇は消えて言った。

「これは・・・。本当に・・・。俺は光をつかんだのか・・・。」

「その通りだ、加納俊平。お前を助けに来た。それと海東も・・・。」

「失礼な言い方だね、士。君が加納君かい？この世界の安全は保証したよ。」

二人も本当に現れてくれた・・・。これは特撮ファンにとっては、最高の話だ・・・。

「それじゃあ、行くか・・・。次なる戦いへ！海東！加納！」

光が消えて、わずかな残光だけが残っていた。

やはり先程のは夢ではない。現実だ！

現にあの二人が目の前にいる・・・。それだけでもすごい。

遂に俺の目の前でシアンの仮面と、マゼンタの仮面、ディケイドとディエンドが現れた。

「行くぞ海東！」

「アタックライド、スラッシュ！ブラスト！！」

「おりゃあ！！」「ふっ！はぁ！！！！」

二人はグリーンモンスターの人間を倒して、憑依していた本体を分離させ始めた。

「俊平！人手が足りない・・・。くそ！！」

「アタックライド、ブラスト！」

ディケイドは、ガンモードに変更し、ディエンドと背中合わせになな

り、周囲にいる怪人供を蹴散らした。
やはりそうだった。記念すべき第一回目のゲストであるべき人物がこの二人なんて、と思った。
「わ、分かった。今すぐやってやる。来い・・・・。だ・・れか・・・・。」
すると、心が３６０度回転するような感じが体を走った。
「う、うううう。」
俺はとっさにつむった目を開けた。すると、前と同じ残光がめの中で輝き続けていた。
やがて俺はあることにきずいた。
「あ、れ？助っ人がいないぞ・・・・。」
焦りに焦った俺は周囲を見渡したが何も見えず。
そこで俺は気がついた。ＲＩＤＥＲの言葉を・・・・。
「君の思う通りに、誰かがその力を分け与えてくれたり、助けに来る。」
その言葉を思い出し、俺は行動に移すことにした。というかもう移していた。
腰に両手をあて、右手を左前に突き出し、徐々に右へ移動させ俺は

言っていた。

「転送変身！！！！」

すると体全身が熱くなって、俺の体を包み込んだ。

その言葉にはさすがに二人を驚かせていた。そのポーズに赤色と言ったらおわかりだろう。

そう。仮面ライダークウガに俺は変わっていた。

「そんな・・・。やっぱり、この力は本物か・・・。」

俺は心に決心し、怪物立ちに突進していった。

「おりゃあああ！ふん！」

次々に怪人たちを倒していった。

「殴っても痛くない・・・。でりぇえ！」

「あいつなかなかやるな」

「確かにね。ふっ！」

脇からはいずりやってきた怪人を海東は撃ち倒しながら言った。

「おるらあああ！ふ！」

「んじゃあやるか。オイ俊平！」

俺は戦っている最中に声を掛けられたため、つい横を向いた。そのため怪人の一人に殴られた。

「いってええええ！」

怪人はどんどん襲撃してきて、口から毒液を吐いてきた。

俺はそれを何とかかわした。

「く、あぶねえ、待ってくれ。士さん、海東さん。」

戦いの最中に話しかけられるのはつらいものだな。と俺は思った。

すると、後ろから弾丸が飛び怪人を倒した。

「助けたからさあ、早く！」

俺は走りだし二人のもとへ駆け寄った。

するとディケイドはライドブッカーから黄色のカードを一枚取り出した。

「俊平・・・。ちょっとくすぐったいぞ！！！」

「ＦＩＮＡＬ　ＦＯＲＭＲＩＤＥ　ククククウガ！」

「うへえええええ。」

全身が１８０度回転したとはこういうことだ。目が回った。率直な

感想はそれだけだった。

「いくぞ。俊平！」

もう一枚の黄色いカードを装填すると、また音声が流れた。

「ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫＲＩＤＥ　ククククウガ！」

すると俺の体に乗っかり、俺は気がつくとものすごいスピードで怪人どもに突っ込んでいった。

知らないうちに次々に倒れていく怪人ども。

「いくぞ！たあ！！！」

大きく跳び怪人を蹴り上げ俺へとパスし、大きなあごで俺は叩きつけた。

すると怪人は大爆発をした。

「ふう。これで、一見落着ということか・・・。ありがとうございました！」

「ああ、それより、初めて会って一緒に戦った中でも、なかなかやりやすかったぞ。」

それはそうだ。なんてたって俺は特撮ファンだ。

ゴゴゴゴッゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッゴゴゴゴゴゴゴゴ！！！！！！！！！

大地が揺れ、空から大きな音を立てて隕石が落ちてきた。

「これは？・・・・。」

第四話　「怪物／Ｍｏｎｓｔｅｒ」

「これは・・・。怪獣！」

俺が空を見上げると、そこには怪獣がいた。

あまりの巨大さに、ついぽかんと口を開けた。

「まあいい、行くぞ！！海東、頼む。」

「行くよ士！」

海東が装填したカードは、ディケイドのファイナルフォームライド。

そう、彼等はジャンボフォーメーションになるのだ。

「マジで行くんですすか・・・？」

俺は二人に聞くと帰ってきた返事はどちらも同じ。

「「当たり前だ！」」

「痛みは一瞬だ！」

カードから放たれた弾丸は、ディケイドを変形させた。

すると今度は、カメンライドカード、Ｊを装填した。

「すげー！」

怪獣とともに並ぶ巨大なライダー。その肩に飛び乗るディエンド。
すると、手招きをして俺を誘うディエンド。
俺も何とか飛び上がり、肩に乗った。
「ＦＩＮＡＬカメンライド、デデデディケイド！」
電子音が鳴り、コンプリートフォームになったディケイド。
十枚のカードが右肩から左肩へかけて、まとわれている。
早速前進し、謎の怪物に突進していくディケイド。その肩の上に乗っかっているディエンドと俺。
「俊平！ぼくたちも行くぞ！」
「は、はい！」
とてもこんな巨大な敵相手に、かなうわけがないと言いたいところだったが、ただまっすぐを
ディエンドは見つめていた。
「ＦＩＮＡＬＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　デデデディエンド！」
次々に怪獣めがけて輪廻する輪。それを矢のごとく突き抜けるディメンションシュートは、

怪獣の左目に直撃した。それを浴びて、ひるむ怪獣。

「よし。後は頼んだよ、士。」

「ああ、任せておけ！」

黄色いカードを装填させ、ベルトをたたくと電子音が鳴った。

「ＦＩＮＡＬＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　デデデディケイド！」

大地を揺るがすほどのジャンプをし、何枚ものカードが現れ、それを突き抜けて

怪獣に蹴りを放った。

「ヴおおヴぉヴぉヴぉヴぉヴぉ！」

うめき声をあげて倒れていく怪獣。大きな爆発音とともに倒れる怪獣。

もはや怪獣もこれまでだった。

「ふう。これで終わりか。」

変身を解き人間の姿に戻るディケイド。

「ありがとうございました！」

俺はただ礼を言うことしかできなかった。この星を守ってくれたのだから。

「構わない。俺は通りすがりの仮面ライダーだからな。な、海東。」

「ああそうさ。この世界も何とか救われたみたい・・・。」

「だ」という言葉を言っていたのは分かった。

でも、なんかの音に掻き消されていた。そう、轟音とともに・・・。

「ぎゃあああああ!!!」

逃げ惑う人々たち。崩れ落ちるビル群。

ただ見ることしかできなかった。体が動かなかった。

それは、二人も同じ。

そう、そこには・・・・・・。

先程倒した怪獣が蘇っていた。

「うそだろ〜〜〜〜〜!!!!!」

第五話　「巨人／Ｇｉａｎｔ」

「まだ倒せていなかったか。」

案外冷静な二人に反し、俺はものすごく焦っていた。

なぜ倒した奴が生き返る？まあ、ＳＦ映画、特撮作品ではありがちなことだがまさか現実でも・・・。

「士。どうする？もう、手立てはないな。」

士に冷静に語りかける海東。その言葉によって俺は焦りから解消された。

「まだ！手立てはあります！」

「何！まだあるのか？」

士がこちらを向きその手立ては何かと聞いてきた。

それを聞いて、俺は得意げに答えた。

「ぼくの人間クラインの壺を使えば、いいんです。もともとあなたたちもぼくが暗示して、来ましたから。」

得意げに答えた俺は、二人の顔を見てこう言った。

「巨大なの相手には、巨人です！こい、ウルトラマン、こい、ウルトラマン。」

士たちの意見を無視し、暗示を始めた。
暗示を唱えだすと、周りが決まって真っ暗になり、何の音も聞こえなくなれば風なども感じていない。
ただ無心で・・・。
「君かい？私を呼んだのは・・・。ならば行こう！この世界のためにもね！」
暗闇から一気に解き放たれた光。そこにいるのは俺ともう一人。
そのもう一人の男は右手に、ベータカプセルを持っているではないか・・・。
その人に俺は名前を尋ねた。
「私の名前か。ハヤタ・シン。またの名をウルトラマン。」
ベータカプセルを上にかざすと、ハヤタは光に包まれた。
「おい！成功したぞ！俊平！」
士がなぜか気絶している俺をたたき起した。
目を開けるとそこには、巨人と怪獣の姿があった。
成功している！！！あれは夢じゃない！と心の中で、確信した。

「よし！成功した！行け！ウルトラマン！」

俺は知らず知らずのうちに応援していた。

「あれがウルトラマンか・・・。」

士も初のお目見えで、少々あの大きさに驚いていた。

でも、まだまだ勝負はこれからだ。

ウルトラマンは怪物めがけて、足を大きく振り上げて、かかと落としをした。

怪物はその場に頭から落ちた。怪物が倒れるだけで、ものすごい地響だった。

揺れる地面に立つ三人。

「なんて激しい戦いだ・・・。」

と俺は度肝を抜いた。

ああ、こんな戦いをマジマジと見れるなんて。と俺は、地球がピンチなのにもかかわらず、

自分の優越感に浸っていた。

怪物はまた立ち上がり、今度はウルトラマンへ赤色の炎を吐いてきた。

それをウルトラマンはかわし、遂にはウルトラマンが右手を、後ろに構え、円形の光輪が現れた。

こちらか見ても分かるように、ウルトラマンから集中力とものすごい気を感じた。

そして、光輪が完成した時、その輪を放った。

「ギャアアアアアアア！！！！！」

ひどい叫び声とともに、右手から尻尾がその光輪によって、切断された。

斬りおとされた右手は浄化された。そして、尻尾も。

ウルトラマンは、腕をクロスにくみ、全身の気をためた。

全身から湧き上がるパワー。そしてついにウルトラマンは光線を放った。

「スペシウム光線だ・・・。」

解説をいり交えて二人に説明した。

ものすごい地割れと共に、大地が避け、周りのビル群のガラスが割れた。

大きな大爆発で、怪物は塵となった。

「ありがとうございました。」

俺は丁寧なあいさつをした。士はいつもながらあいさつを恥じていた。

「加納君。この世界がピンチになったら、また呼んでくれたまえ。いつでも来るさ。」

代わりに海東が挨拶をしてくれた。

その間に、人間に戻っていたハヤタ。俺はハヤタへ歩き出し、挨拶をした。

「君のために、これからも戦い続けるよ。それではさようなら。」

三人は瞬く間に白い光に包まれ、無限の彼方へと旅立った。

西暦２０７９年2月２５日。

国連医療先端科学化はグリーンモンスターへの抗ウイルス剤を完成させた。

全世界の人々に配られ、事なきを終えた。

後日俺は、ＲＩＤＥＲに呼ばれ、国連医療先端科学化第三研究室に呼ばれた。

第六話　「侵略／Ａｇｇｒｅｓｓｉｏｎ」

「失礼します。」

第三研究室に入ると、たくさんの白衣を着た男がいた。

その中に、スキンヘッドのＲＩＤＥＲはいた。

「よく来た。」

相変わらず単調な日本語で、俺に話しかけてきた。

こちらに向かってきたＲＩＤＥＲは、そこに座れと命令した。

白いソファに腰掛け、俺の目を見た。

「君のおかげで今回は救われた。ただ、宇宙管理局からは謎のメッセージが送られてきた。

それがこれだ。」

コピーされている紙を俺に渡し、手で追いながら読み始めた。

「この宇宙は総力を結集し、何としてでも地球を破壊する。

そして、私たちは宇宙の神となる。」

そのように描かれていたというメッセージ。だがこれはホントなのだろうか・・・？

「ということだ。だから、まず君の力を最大限に使うことだ。」

「え、この力で充分じゃないのか？」

俺は、また予想外なＲＩＤＥＲの発言に驚いていた。

すると、どこからかＲＩＤＥＲを呼ぶ声が聞こえた。ＲＩＤＥＲはその方向を見た。

「か、完成しました！！これがメビウストランスファー。無限の転送。

これさえあれば、彼の力でどうにか・・・。」

ＲＩＤＥＲはその男を連れ出し、俺のもとへと走ってきた。

そして、俺は何かメカニカルなものを渡された。

「これが、メビウストランスファーだ、これさえあれば、君が地球を救えるぞ。」

「こんなもので・・・。」

俺は、メビウストランスファーを眺めながら言った。

このような、携帯型で俺は助けられるのか・・・。と思った。

「使い方だが、簡単だ。このボイスリードで、言った戦士の名前から、その戦士を

転送。そして自分の力へとすることができる。

それを使い分けるには、この「転送」ボタンと「変身ボタンだ・・・。」

確かに、黄色いボタンにはｔｒａｎｓｍｉｓｓｉｏｎと書かれてあった。

そして、赤いボタンにはｔｒａｎｃｅｆｏａｍと書かれていた。

下にはいくつもの数字ボタンが並べられていた。

「そして、その数字には、いくつものデータが入っている。たとえば一番を押してくれ・・・。」

俺は、ポチっと1番を押した。

すると、電子音声が鳴った。

「ＨＥＲＯ　ＮＯ．１ウルトラマン。」

すると、ウルトラマンについての解説をしていた。

「なんてっこった・・・。すげーじゃねえか！！」

ＲＩＤＥＲは得意げに、さらにつけたした。

「これは、怪獣や、異星人、怪人、ありとあらゆるもののデータもつまっている。

そして、私たちが研究しているものに、日々データが更新される。
」
これはファンにとってはうれしい一品だと、俺は軽い気持ちで考えていた。
だが、考えを改めると、、それどころではなかった。
「頼んだぞ・・・。君・・・。」
ＲＩＤＥＲはすぐさま、研究室を出て言った。
俺の心の中に、かすかに、「正義」という心が芽生えていた・・・。

～3月1日～

「うっ！！！やめ・・・・ろ！！！ぐはっ！！」
一匹の怪物が頭角を現し始めた。

「グルルルル・・・。グバババババ！」
よだれをたらし、何者かが人々を殺害していた・・・。
謎の怪物は、石油コンビナートを狙いあさっていた。

「そこにいるのは、誰だ？」

警備員の男が、ライトで倉庫を照らしていた。すると、

「ギュアアア！！」

怪物がライトを交わし、男の目の前まで迫ってきた。

怪物は、鋭い爪で警備員の腹部を、瞬時に切り裂いた。血を流し倒れる警備員。

その制服には、じっとりと紅い血がついていた。怪物はまた歩き出し、次なるコンビナートへ。

～次の日～

「しかし厄介な事件が多いな・・・。」

俺は、朝刊に目を通した。

どうやら今日の一面は、コンビナート事件のことだった。テレビをつけても、その事件ばかり・・・。

「何だよ・・・。全部の石油がなくなってるって。ガソリン代がはねあがるじゃねえか！」

下らないことで、俺は焦っていた。焦らなければならないのは、地

球を救うことだろ。

だが、正直あまり実感がわかない。

一回しか戦ってないんだ。実感がわかないだろ・・・。

「キュイーン、キュイーン」

トランスファーが鳴り響いた。

これは、怪物出現の合図の音声だ。

「まてまて！飯食ってないぞ！！！」

そういって、最後の食パンの一口を口にくわえ、玄関を飛び出した。

「P－P－P－P－P」

「ここか・・・。急がなきゃ。スキャナーモード！」

トランスファーの上部からレーダーが発し、怪物の居場所を捜索した。

すると、第八格納庫の裏から、強力な炭化水素を察知した。

「そこか！マーキングモード！」

先端から、異臭を放つペイント弾を怪物にぶつけた。

怪物の顔面に、ペイント弾は命中した。右目の視力を若干失った怪物は、俺の目の前で
暴れ出した。
「ギュララララ！！」
「よし、今だ。スキャナーモード。
読み込みを開始したトランスファー。
「カイドクカンリョウ・・・。ＭＮＯ．５８４９。カルシャード。
体にたくさんの石油を含み、炭化水素を帯びている。鋭い爪で、
敵を威嚇。
体長、４ｍ。体重８９０ｋ。」
トランスファーのありがたい解説により大体分かった。（士っぽく）
赤いボタンを押した。
「ｔｒａｎｃｅｆｏａｍ、クウガ！」
すると全身に力がみなぎりだした。
体全身が、真っ赤な鎧に包まれる。そうして、俺はクウガになった。
「行くぞ！カルシャード！！」

俺は全身で突進し、強烈なパンチを放った！

第七話　「石油／Ｐｅｔｒｏｌｅｕｍ」

「おりゃあああ！！」

カルシャードの胸部分に、強烈な一撃を食らわせる。

だが、カルシャードはその程度では衰えもしなかった。

「シュエエエエ！！！」

黒色の液体を吐き、俺の腹へ当てた。その黒い液体は石油だった。

「まずい。これで発火されたら・・・。」

カルシャードは、口から火球を吐きだしてくる。

それを何とかよけた俺だった。

「くそこうなったら・・・。」

「ＷＴＴＳ　クウガ　ドラゴンフォーム。」

トランスファーから音声が流れ、クウガはドラゴンフォームとなった。

左手にドラゴンロッドを持った。

「行くぞ！カルシャード！！」

思いっきり振り切ったドラゴンロッド。それによって与えられたダメージはでかい。

カルシャードのわき腹を強打し、ひるむカルシャード。

「よし、いまだああ！」

そう思った時だった。

体を伝うように流れていた石油は、足で冷やされ、硬直していたのだった。

相手を動かすことによって、極寒の中、風で冷やさせるというなんとも緻密な技。

まんまと騙された俺・・・。

「くっそおお！」

あがいても無駄だった。カルシャードはもうそこまで来ている。

そしてカルシャードの鋭利な爪は、俺の顔面を切り裂いた。

「うわあああ！」

火花を上げて倒れる俺。もはや大ピンチと化していた。

だが、このトランスファーには無限の力がたまっている。それを生かさねば・・・。

「シェエエエエ！！」

黒い液体を吐こうとした時だった。

「ＷＴＴＳ　フラッシュ。」

その瞬間、あたり一面光が放たれ、白い世界へとなった。

カルシャードはそれを、至近距離５センチ程度で受けたため、目が逝かれていた。

「ギュアアアアアア！！」

「今度こそ・・・。」

静かに立ち上がり、俺はカルシャードの背後に回った。

奴は今でも、ずっと目を抑えている。

「ＦＩＮＡＬ　スプラッシュドラゴン！」

その音声と共に、俺は背中にスプラッシュドラゴンを決めた。

「決まったか？」

俺の鼓動は高なった。

カルシャードの動きが止まる。だが、カルシャードはドラゴンロッドをつかんだ。

「何！ぐわあ！」

ドラゴンロッド共々、投げ飛ばされる。俺は倒れ転がった。
すぐさま立ち上がり、パンチをするもドラゴンフォームのパンチはとてつもなく弱い。
強靭な肉体で、俺のパンチをもろともしなかった。
ドラゴンロッドをとりに行こうと、もがくも、今度は手を踏まれた。
「うわあああ！！」
強力な踏みつけで、俺の右腕は逝かれた。
だが最後まであきらめなかった。というよりあきらめたくはなかった。
「ＷＴＦＳ　０４７ドリル」
トランスファーをドリルモードにし、カルシャードの体を貫こうとするも、右手に力が入らない。
だが、貫通が無理なら斬撃だ！
「行くぜええ！！」
二発、胸部に傷を与える。
そしてまた更に、カルシャードの火炎攻撃をよける。もう一度、強靭な皮膚を切り裂いた。

少しずつダメージを浴びて、カルシャードは弱ってきていた。

「どうやら、予想は的中したようだな・・・・。どんな強靭な体も、同じところに浴びせれば、

やがてはもろくなる。ってな。そのまま行くぜ！」

「ＷＴＴＦＳ　００３フラッシュ」

もう一度目をくらませた。

そして、とどめの一撃を放った。

「ＦＩＮＡＬ　ドリルスマッシュ！」

体から少しずつ漏れてきた石油。傷の隙間からは、黒くどろりとしたカルシャード石油が出てきた。

全身を前のめりにさせ、カルシャードの傷めがけて突きさした。

「ギュアアアアアアア！」

大きな爆音と共に、大爆発をした。

「はあはあ・・・。うがあっ！！」

右手に激痛が走った。そのせいで、トランスファーを落とした。

俺はその場でもがいた。

だがこれだけでは済まなかった。

「ギュアアアアアア！」

先程のカルシャードは、ただの試研究の下衆だった。

「ギュアアアアア！」

もう一匹の怪物が咆哮を上げた。

「そうか、『宇宙軍団』が、侵略しに来たか・・・。そんな奴らにこの地球を破壊させてはならんぞ！

行け！ショッカーども！この星を守り、私たちの星にするために！！！」

「くっ・・・。指が・・・。やられてる。」

自分の指を動かそうとしても、少ししか動かない。

悔しい気持ちと、もやもやが心の中に溜まっていた。

「やめろ！うわああ！」

石油コンビナート警備員がまた、やられた。

だが、それだけではなかった。先程、命を途絶えた警備員は、立ちあがった。

「イーッ！！」

警備員は体に骨のマークを模した怪人になっていた。

そして、戦闘員は怪物めがけて蹴りを放った。だが全く効果は無かった。

怪物に持ち上げられ、地面に何度も叩きつけられた。

そのまま、戦闘員は息の根を止めた。

「しゃあああ！！」

奇怪な声をあげて、怪物は消えた。

～次の日～

「いてええええ！！！」

目が覚めて早々から、けがをしていたことを忘れ、うっかり手を使っていた。

そのせいで、先程激痛が走っていた。

「母ちゃん！！痛いいい！！！」

「しょうがないでしょ！！あんたが怪我する方が悪いんだから！全治１週間よ！」

早速朝から、母の怒号が飛んだ。

しょぼしょぼと椅子に座り、朝飯を待っていた。

そして出てきたのは、いつも通り食パン。

それを口に加えながら、新聞を眺めた。そしてトップ記事欄に、

「また一人・・・。なぞのコンビナート事件の続き・・・。」

と書かれていた。

「え・・・。うそだろ・・・。なんで。」

俺は一瞬にして、鼓動が高鳴った。

昨日、確か決着をつけたはず・・・。それなのに・・・。

ＴＶをつけ、チャンネルを回した。どこのＴＶ局も例の事件のことばかりだった。

「犯人の形跡は何一つ見当たっておらず、ただ、現場に落ちてい

たのは

どくろのスーツ・・・。」

映っているのは、あの怪人で有名な戦闘員の服だった。

「うそだろ・・・。なんでだよ!」

すぐさま、トランスファーを準備して、自分の部屋へ行った。

そして、コールモードで、ＲＩＤＥＲに電話をかけた。

「おお、君か・・・。早速伝えたいことがある。すまないが君の倒した怪物は

ダミーだ・・・。」

「カルシャードがダミー・・・。あの強さで・・・。」

絶望感に満ち溢れた。俺は右手をやられたのに、奴はダミーだったなんて。

無駄骨を折っていた・・・。

「彼らは、シャーブ星に住んでいる。彼らの数は地球の４分の１の面積でありながら

２０億人だ。そして、その技術で自分たちのダミーを一体成功させた。

それが、君の倒したカルシャードだった・・・。すまない。まだトランスファーの機能は充分では

なかった。本当にすまない。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9912o/

SFSFSFSFSF

2011年10月8日02時36分発行